

## 三町歩は遺体の山

群馬県 小池 ウメ

国策に沿って大陸へ、食糧増産のため、一家をあげて渡満して七年あまり、満人とも仲良く暮らせるようになった矢先、主人は終戦の六月出征、九月シベリアへ。そうして十三年間の抑留生活。私は昭和二十三年二月二十四日、ナホトカ港より函館に上陸し、昭和二十四年四月、現在地に入植して四十有余年夫は七十三歳で肝臓ガンになり、一昨年他界しました。

昭和二十年八月十三日、八路軍、匪賊の襲撃を受け、ソ連軍の空からの攻撃、集団で逃げまどううち、食糧はなく、体力の弱い子ども達の間には、悪性のハシカが流行し、毎日ばたばたと亡くなり、夜ともなれば、満人達が徒党を組んで、着ている服はもとより、幾ばかりもない物品を取上げて暴れまわりました。

そうして、多くの人の命が奪われました。若い娘達は、

身を守るためにスミで顔を汚したり、坊主頭にして泥を塗りつけたりしての逃避行でした。

私は新京に兄がおりましたので、いろいろな人に助けられながら、命からがら一か月余で兄夫婦の所にやっとたどりつきました。その夜、ソ連兵が五人ジープで乗りつけ、家中を荒しまわりましたが、兄夫婦とその子ども達に助けられてことなきをえました。

しかし、次の朝、私も身を守るため坊主頭にしました。ときに二十七歳でした。自分の体を守るため泣き言などを言っているときではないのです。一寸先が判らないので、どんな場面を見ても出会っても涙も出ません。

兄の勤務先が中学校の農場、三町歩あまりの所が、足の踏み場がないほどの墓場と化してしまいました。北満から輸送された死者だったのです。

農場の白木の塔場で、夜も明るく感じましたが、悲しい、可哀そう、恐ろしい等との思いやる気持ちは持てませんでした。

今までの地主が乞食になり、地主の下で働いていて満人が大尽になったのだから、私達の心の切り替えがたい

へんでした。

人々は栄養失調で苦しみながらも、なんとか日本へ帰りたいたい一心で、新京の寒く長い冬にも耐えられたのだと思います。

零下三十度あまりにもなる中、良く生きていたものだと思います。もう日本人等というプライド等は無くなり、食うことに困った親がなんとか子どもだけは助けたいと、泣く泣く現地人へ里子に出している人達もいました。

もっと悲惨なことを見ても感じなくなってきた頃、やっと日本に帰れるという噂が流れ始め、ほんとうに待ち遠しい日々でした。内地の人達の困ったのと違い、海の向こうの大陸では考えもつかない恐ろしいことの連続でした。

七月二十三日、やっとのことで、待ちに待った引揚げとなり、屋根のない列車で、雨のなか四日ばかりでコロ島へ。そうしてアメリカの上陸用船で博多港に。七百五十人乗り。一坪の所へ大人四人、蒸し風呂のような中を四日ぐらいいして博多港に着きました。

着港して一週間足止め、大陸から命からがら帰ってきた引揚げ者所持金は千円しか認められず、内地にいた人にはわかることのできないみじめな生活でした。

大陸で築きあげた財産、命にはなんの保障もなく裸のまま放り出され、やっと帰れた人も生活の借金に振りまわされて、苦しい開拓生活で亡くなった人も数多いでしょう。

生き残った人が少なくなった今、あのとときの苦しさ、辛さを語ってもわかってもらえなくなった今、戦争の影でおびえて逃げて何も残っていない、引揚げ者に対する理解を期待しております。

## 在滿十五年の足跡

埼玉県 齊藤 勝好

昭和六年六月一日、満州独立守備歩兵第一大隊に入隊し、満州事変ぼっ発以来各地に転戦し、八年十一月除隊して、大連昌光硝子に就職、十三年阜新へ転職した。